

〔学術論文〕

「危険な女」¹⁾ と放浪する主人公
—フォークナーの『八月の光』と中上健次の「不死」—
“The Dangerous Women” and the Nomadic Heroes:
Faulkner's *Light in August* and Nakagami Kenji's “*Fushi*”

田中 敬子
Takako Tanaka

要旨：中上健次がアメリカ南部作家ウィリアム・フォークナーから影響を受けたことは知られているが、本論では普段あまり比較対象とならない、フォークナーの『八月の光』と中上の『熊野集』から「不死」を取り上げる。両作品は、放浪する主人公と共同体の中で異端の立場にいる怪物的な女の確執、主人公による女性の殺害が共通している。作者たちはそこで、古典的な神話やその土地の伝説のパロディを用いつつ、国家や地方の物語構造を脱構築し、それらの物語が強化する家父長制社会を批判的に超えようとする。ただしフォークナーが、南部の人種差別のみならずアメリカ合衆国全体の二項対立的思考法を越えようとして、あいまいな擬似家族の放浪を新たな可能性として最後に提示するのに対し、中上は日本的な物語の聖と穢れの容易な還流を拒否して、主人公に孤独な放浪を続けさせる。

キーワード：物語、家父長制社会、フォークナー、中上健次

20世紀アメリカの南部作家ウィリアム・フォークナー（1897-1962）は、各国の作家たちに影響を与えてきた。フォークナーと同じくノーベル文学賞を受賞した大江健三郎もその一人であるが、中上健次（1946-92）も自身の作品におけるフォークナーの影響を公言している。中上の多くの作品の舞台となる熊野は、フォークナーのヨクナパトーフアを思い起こさせる。²⁾ 中上は、フォークナーがヨクナパトーフア・サーガで行ったのと同じように、熊野にある路地出身の人々について、いくつもの作品にまたがってその動向を語っている。

もちろん、フォークナーが南部の、落ちぶれたとはいえ旧地主階級出身であるのに対し、中上は部落民出身であった。中上は自らをマイノリティ作家と考え、フォークナーに影響を受けたアフリカ系アメリカ人作家やラテン系作家と同様、フォークナーが奴隷制という過去を持つ故郷に向ける批判的かつ複雑な視線を意識している。伝統的に家父長制を重んじる日本社会で少数派の

非嫡子として生まれた中上は、南部で歴史と文化を継承する嫡男としてのフォークナーの対照的な地位と苦境を理解していた。フォークナーは白人黒人二項対立という南部の人種差別の不当性を痛感していたが、一方、深南部に生まれ育ち、南部の伝統的な物語がいかに故郷の人々を魅惑するかもよく理解していた。南北戦争の敗者である旧南部の大義と血の呪いは、彼を激しく反発させると同時に惹きつけるものでもあった。

伝統的な物語構造や、民間伝承に大きな影響を及ぼす土地感覚や歴史の力は、フォークナーのみならず中上の文学にとっても重要である。中上は、日本の民間伝承にみられる聖なるものと穢れたものの二項対立のみならず、これらの物語が導く結論の危ういカタルシスにも敏感である。彼は故郷熊野でそのことを鋭く感じていた。熊野は古代日本とのつながりが深く、ここには古代の神々や天皇に関する多くの神話や伝説が残されている。³⁾ 被差別階級を生み出す構造を内包する天皇制度のもとで中上は、天皇を中心に家父長制の想像的共同体を作り上げた日本の神話や伝説を読み直す。古代日本以来の隠国の地である熊野にマイノリティとして生まれ育った中上は、故郷や伝統的物語に対して愛憎半ばする。時空間や階級は異なるが、フォークナーと中上はそれぞれ、二項対立からなり、致命的な差別を温存する精緻な物語構造によって支えられる家父長制社会を告発する。

本論においては、フォークナーと中上がそれぞれの社会の物語構築に対する批判と脱構築をめざして、どのような相似た、または異なった戦略を用いたかを検証する。両者とも故郷の土地と歴史に密接につながった伝説や物語に魅せられているが、同時にローカルな、またはナショナルな家父長制社会の物語構造を超えて彼ら自身の語りを創造しようとする。彼らは故郷にいながらにして自分たちを多かれ少なかれマイノリティの漂泊者だと感じている。ここでは、フォークナーの小説『八月の光』(1932)と中上の『熊野集』(1984)中の短編「不死」にみられるさすらいの主人公と危険な女の関係の検証と比較を中心とする。フォークナーと中上が比較される場合、これらの2作品が取り上げられることはめったにない。⁴⁾ しかし中上は、フォークナーへの言及が明らかな『地の果て、至上の時』(1983)の原稿を書き始めたころに、『熊野集』として出版される短編群を雑誌に掲載しつつあった。⁵⁾

フォークナーと中上の上記のテキストの主人公は、地域社会に納まらない放浪者であり、またそのアイデンティティを1つの範疇に分類することが難しい。『八月の光』のジョー・クリスマスは、自分に黒人の血があるかどうかあいまいなため、南部社会に適応できない。彼は反逆者の一面を持った漂流者であり、その点で中上の『熊野集』の一連の主人公に似ている。中上はこれらの主人公たちが部落民出身であるとは述べていない。「不死」の主人公も、外見から黒人の血があるとは見えないクリスマスと同様、得体が知れないだけだが、コミュニティからはみ出している。そのような彼らと、一応コミュニティの中に居ながら爪弾きにされている女性との出会い、階級制社会とジェンダーの役割を強化する伝統的物語構造によって大きな影響を受けてい

る。

『八月の光』と『熊野集』には、古代神話や伝説にある怪物の性質を分かち持つ危険な女たちが登場する。フォークナーにせよ中上にせよ、家父長制社会を批判する一方で、女性に対して格別共感や同情は示さない。フォークナーはしばしば女性嫌悪が明らかだと非難されるし、中上も女性の、または女性に対する暴力描写が目立つ。⁶⁾しかし彼らが描く境界すれすれに位置する女たちは、主人公との軋轢において家父長制社会の転覆に寄与し、また彼女たちに対する主人公の反応は、この社会が抑圧された者、排除された者たちをどのように扱うかを明らかにする。

『八月の光』で、北部の奴隷廃止論者の娘ジョアンナ・バーデンは、南部の小さな町ジェファソンに異端者として住んでいる。ジョアンナが当初、彼女をレイプしようとするジョー・クリスマスに対し冷静に男のように闘い、次にセックスに狂い、最終段階では神に仕える者として彼に祈ることを強要する姿は、怪物じみている。実際のところ、この小説でジョーはジョアンナばかりでなく、彼の世話を焼いたり食べ物を供給する女性を一般に悪とみなして敵対する。孤児院での栄養士やジョーの初恋相手であるウェイトレスは、自分にとって状況が悪くなるとジョーを裏切り、彼の黒人の血を持ち出して彼を責める。ジョーはいつも、女性の部屋や家に閉じ込められると厄介事が起こると感じる。孤児院で彼は、栄養士の部屋のカーテンの陰に隠れていて偶然彼女の情事を目撃し、飲み込んだ練り歯磨きを嘔吐した。思春期には、真っ暗な掘っ立て小屋で黒人少女とセックスするはずが、パニックに陥って少女を激しく殴る。養父に反抗して罰として暗い部屋に閉じ込められたときは、養母がひそかに食事を運び込むが、ジョーはそれを拒否して投げ捨てる。暗い閉鎖空間で、性または食物で彼を誘惑する女性は危険である。彼女たちはジョーが制御したい身体的欲望を刺激し、彼を屈服させようとする。

ジョーは養父を殴り倒し、その生死もわからぬまま逃走するが、このとき彼は南部家父長制社会と同時に女性たちからも逃走した。彼は自分を家父長権力に従わせようとする秩序に抵抗するが、彼のままたらぬ身体性を明らかにする女性たちにも心を許さない。しかしジェファソンに来てジョアンナの屋敷に入り込んだとき、ジョーはジョアンナと家父長制社会の双方と対峙することになる。

ホメロスの叙事詩『オデュッセイア』で、魔女キルケーはお腹をすかせた男たちを食事でもてなした後、豚に変えてしまう。ジョアンナは、ジョーを誘惑する意図は持っていなかったが、彼に食事を用意する。その後彼女はセックスに狂ったファム・ファタルの様相を呈し、性的行為の際、ジョーを「黒人！」(285)と呼ぶ。そして彼らの関係の最終段階では、ジョアンナは極端に熱心なキリスト教徒となり、ジョーが黒人大学で教育を受け、彼女の片腕となって黒人地位向上のために尽くすよう強要する。ジョアンナはキルケーのようにジョーを豚に変えないとしても、彼を黒人にしたいのである。

北部出身のジョアンナの祖父と腹違いの兄は、黒人の参政権獲得をめざしていたが、南北戦争直後に南部の町ジェファソンで、町の名士であったサートリス大佐に射殺された。ジョアンナは、サートリス大佐はそれによって「町の英雄」(274) だった、とジョーに語っている。バーデン家の彼女は町の敵であり、目立たないというだけの理由で存在を黙認されているにすぎない。その彼女を殺害したジョーは、地域社会にとって危険な怪物を倒した町の英雄になる可能性がある。色情狂のジョアンナは髪の一房一房が「吸盤を持つ蛸肢のように生きているかのよう」(285) で、ジョーが最後に彼女と会ったとき、旧式銃を掲げた彼女の腕は壁に「鎌首をもたげた蛇」の影のように「怪物じみて」(310) 映る。これらの描写は、髪が生きた蛇からなり、見る者を石に変えてしまうギリシャ神話の怪物メドゥサを思わせる。最後の対決でジョーはジョアンナを直接見ず、彼女の影が映る壁を凝視している。ギリシャ神話で英雄ペルセウスは、盾に映ったメドゥサの影だけを見て彼女を倒し、首を刎ねる。『八月の光』のジョアンナは、ほとんど頭部が切断されかかった状態で発見される。

古典の英雄ははぐれ者、さすらい者として登場することが多いが、怪物退治を成功させた暁には英雄として町に迎えられる。しかしジョー・クリスマスは決して町の英雄にはなれず、主人公ジョーと怪物的女性ジョアンナは、地域社会の掟を奇妙なかたちで反映させている。ジョーのあいまいな身体性や、ジョアンナが彼に黒人のアイデンティティを強いることは、南部社会の本質にかかわる問題である。しかし彼らは、油断のならない女の身体と家父長制の父の法、という典型的なジェンダーの役割を交換して演じている。ジョアンナは、奴隷制反対論者の父から与えられた義務を意固地に守り通した挙句、その死によって、レイプされて殺される、という南部神話中の白人女性となる。ジョーは黒人か白人かわからないというあいまいな身体性を抱えたまま、町の人びとからすると、北部奴隷廃止論者ジョアンナに制裁の鉄槌を下す南部家父長制社会の代表的復讐者を演じる。しかし彼はすぐさま黒人レイピストの殺人者に変えられる。出生事情が不明で黒人／白人の区別を越えてしまうジョーは、二項対立の人種差別で成立する南部社会をかく乱し、崩壊させてしまう危険をはらむ。古典的な怪物退治神話とのアイロニカルな相似は、南部の人種とジェンダー神話の矛盾を明らかにし、さらに、いったい誰が怪物なのかと問いかける。パーシー・グリムによって殺され去勢されたジョーは、斬り殺された怪物として町に記憶されるかもしれない。しかし、ジョーを黒人レイピストの殺人者、ジョアンナを犠牲となる南部女性と決め付けるジェファソンの町は、もっとまがまがしい怪物ではないのか。

ジョアンナはジョーとの性的な行為の際、彼を「黒人！」と呼ぶ。彼女は父親から、黒人は神が白人にかけた呪いである、と聞かされて育った。この父親もジョアンナも白人の罪を償うべく黒人の地位向上に尽くすのだが、父親はジョアンナに次のように漏らす。「しかしお前はそれ〔黒人の影〕をお前と同じレベルに引き上げることはできない。ここに来るまで私にはそれがわからなかったが、今ではそれがわかる。でも逃げるわけには行かないのだ」(279)。北部出身の

奴隷廃止論者であった彼らは、黒人の生活改善に尽力するものの、黒人の能力が生まれながらにして白人より劣る、と考えている。その結果、ジョアンナは黒人に対する罪意識や宗教的義務感からいつまでたっても逃れることができない。確かに彼女は、南部の人種差別主義ばかりでなく父親の信念の拘束にも抗おうとする。しかしジョーとの最も私的な身体的接触の場でさえ、ジョアンナは故意にファム・ファタルの役を演じ、セックスの高揚感をあおるために人種のタブーを口にして、自分が南部の人種コードやピューリタンの父の権威に従う義務に反抗していることを自らにしっかりと刻み付けようとする。社会に刃向かっていることを意識するために、彼女は自身の身体ばかりでなく、自分が用いる言葉の発話にも頼らねばならない。しかしながら、南部の黒白二項対立も父の支配力も非常に強力で、最終的にジョアンナは父の信念に従って宗教的目的を果たすため、ジョーに黒人になることを強要する。

一方、中上健次の「不死」において、村の女は放浪の被慈利に宿を提供し、そして性的に結ばれる。この話は仏僧を主人公とする日本の山中魔界伝説の変異譚ともいえる。⁷⁾ だが村の女の強力な性的欲望や宗教的救済願望は、『八月の光』のジョアンナに通じるものがある（もっとも村の女には、一族から受け継がれた宗教的義務といったものはない）。彼女は主人公が本物の聖人ではないことにたぶん気づいている。しかし彼女は、ちょうどジョアンナがジョーを黒人と呼ぶように、性的行為の際に彼を「しょうにん様あ、たいし様あ」と呼ぶ。女は「救けて下さいまし」（206）と繰り返し、主人公自身もそのうちに「救けて下さいまし」と繰り返して彼女の首を絞める。

『八月の光』のジョアンナはジョーとのセックスを、白人女性として自らを貶める行為とみなすが、一方でその行為が自分を家父長的かつピューリタンの社会システムから解放してくれるのではないかと期待している。一方「不死」の村の女は、自らを自堕落なのけ者と意識している。彼女は性交中に相手を「しょうにん様あ」と呼ぶことで、仏教が宗教的権威を持つ社会に挑みかかり、かつ禁断の性的エクスタシーを得ようとする。しかし同時に彼女は、宗教的救済を必死に求めてもいる。日本の典型的な仏僧対魔界の女の物語では、僧侶は魔物の女の性的魅力に屈することはない。高德の僧は、仏教が土地の氏神や魔物に勝利して統括管理することを示す。それに対し「不死」の村の女は最初から、被慈利に性的に屈服する姿勢をとり、自分を被慈利に同化させてしまおうとする。彼女はこのさすらい人が本当の聖人ではないとうすうす気づいているだろう。しかし世俗と聖の衝突の可能性に賭けて、彼女は宗教的救済か、社会への報復と転覆のいずれかを願う。性行為や宗教において自身を否定することは自己犠牲の高揚感をもたらすが、階級落差が激しい二人の合体化は、宗教的または社会的階級制度に対する致命的な一撃になりうる。

さらに、村の女が粗末な身なりの放浪者を強引に聖人とみなすのは、日本の民間伝承にみられる霊験あらたかな結末に影響されているためかもしれない。日本の伝説ではしばしば、落ちぶれ、病を得てさすらい主人公が最後に救済されて宗教的または世俗的な栄光を与えられる。主人公は

さまざまな苦難の旅の末、高い身分の父親の誤解や怒りが解けて息子であると認知される。⁸³ この高貴なものと穢れたものの密かな親和性の約束事は、下層民にとって魅力的である。中上は、伝統的な日本の物語が繰り返しささやく聖と穢れの最終的な同一化が、部落民が蜂起する力を殺ぐのに役立つのではないかと疑っている。聖なる者を崇拜することは、虐げられた者の苦悩を和らげるのに役立つ。⁹¹ しかし崇高な、選ばれしものとの同一化願望は、相手が世俗であれ宗教的なものであれ、権力奪取にもつながりうる。村の女は、聖人による宗教的救済を懇望しつつ、彼との性的一体化によってその権力を奪いたとも望んでいるのだ。孤独な村の女と放浪する偽聖人は、その身体的接触にわずかな救済願望を抱きつつ、同時にお互いの中にそれぞれの自殺願望と社会に対する破壊的攻撃性を嗅ぎ取っている。

『八月の光』と「不死」の双方で、主人公たちはそれぞれ女を殺す。ジョアンナがジョーを「黒人」と呼ぶのと、村の女が主人公を「しょうにん様あ」と呼ぶのは、階級の面では対照的だが、二人の女とも、人種的または社会的階級制度を逆説的に利用して男に屈服する姿勢を見せ、その実、男との関係で優位に立ち、支配しようとする点では同じである。自らを意識的に貶めて硬直した家父長的社会からの救済を望みながら、二人だけの最も私的な行為に社会的階級の呼称を持ち込むことははばからない。彼女たちが真に敵対する相手は、社会体制とそれが紡ぎ出す物語構造だが、その闘いの苦しみの中で彼女らは男たちを救済または謀反の道具として使う。ジョアンナは、最終的に南部家父長制社会との対決に敗北し、再び父のピューリタンの教えに従うので、結果としてジョーに黒人のアイデンティティを強制することに加担する。それは彼女をますます怪物化してしまい、ジョーによる殺害を誘発する。一方、村の女が徹底して被慈利を聖人扱いすると、主人公の男は自分のアイデンティティの欺瞞性と女の意志力に圧倒される。

これら危険な女たちと格闘する主人公は、怪物じみた女性と自分に共通点があることに気づいている。ジョーがジョアンナを殺す理由のひとつは、彼女が体現するピューリタンの家父長制度が実は彼の否定的人生の根幹をなすからだ。養父マッキーチャンに激しく反抗しているときでさえ、ピューリタンの教条は、彼がそれを否定することによってのみ存在意義を得るような構造基盤となっていた。また中上の被慈利は、村の女が「救けて下さいまし」というのを聞いて同じ事をつぶやき始める。彼は女の深い絶望と孤独に自らの放浪人生を感じ取り、救済への希求に自分の身体が共鳴し唱和したような具合で「救けて下さいまし」と繰り返す。しかし彼は、その救済が宗教的なものになるのか、自ら戦って勝ち取る世俗的なものになるのか、おぼつかない。村の女は家父長的な権威を通して救済されたがっているが、その権威は、宗教的であれ世俗的であれ、彼女を地域共同体の中でさげすみ周辺に追いやった張本人であったはずである。彼女のあからさまな性欲に潜む権力への反抗は、あいまいな救済願望と同時に存在する。被慈利が女の首に手をかけるとき、彼の中には、立ち向かうべき相手にすり寄って救済を望む自らの幻想を粉碎したい、という思いがあったのではないか。これら2組の男女は、それぞれ彼らの真の敵は社会

であると悟りつつ、その社会階級制を逆説的に反映しながらお互い刃向かう。

怪物じみた女性のほかに、フォークナーと中上のこれらのテキストには、母性的または慈悲深い救済の神を思わせる女性も登場する。しかし家父長制社会に対する挑戦よりも容易な救いを誘いかける点で、これらの女性も怪物的女性に劣らず危険である。母性に対して警戒心が強いジョーに比べ、中上の「不死」の被慈利はとくに、母性または女性の性に救済への道を見出そうとしがちである。¹⁰⁾ 村の女にも救いを求めた主人公の被慈利は、山中で奇妙な女と出会って再び惑わされる。彼女は彼の欲望に案外従順に従い、その性交の場を誰かに見られていると感じて彼が身を引こうとしたときも、意外に強い力で彼を引きとめようとする。赤子のような小さな手を持った不思議な女を眺めながら、被慈利は彼女が観音菩薩ではないか、とひそかに期待する。最終的に彼はそうではない、と結論するが、それでも彼女と一緒に住んでくれ、と発作的に懇願している。

「不死」に登場する山の女の赤子のような手と成熟した身体は、彼女の無垢と女性としての成熟性をともに暗示する。この矛盾した二つの性質の共存は、『八月の光』のリーナ・グローヴにもみられる。臨月間近いリーナは、その豊饒性と静穏さによってしばしば、地母神、または聖母マリアに擬される。¹¹⁾ ジェファソンの町の住民が、未婚で臨月の見知らぬ女性に厳しい目を向けても、彼女はほとんど動じない。また語り手は彼女の「動かない手」(19)に言及するが、それは時に周りの状況と関係なく静かに動き、「手がひとりでに黙考していることを反映」(22)する。「不死」の女の小さな手と同様、リーナの手も、独自の存在であるように見える。二人の女の手は、彼女たちの社会的身分とは関係なく充足した身体性を示している。それは自らの存在と権力奪取のために、地域共同体の境目で身体と言語を駆使してもがくジョアンナ・バーデンや村の女の姿勢とは異なっている。

中上が、「不死」の山の女を描く際に『八月の光』のリーナを特に意識していたかどうかの直接的証拠はない。一方、山の女について、彼が日本の伝統的な魔界の女を原型としたのは明らかである。彼女の小さな手は、聖性の徴でありうると同時に、地域社会の標準からは排除される異形の徴ともなる。実際彼女は、過去の壮絶な戦に破れて落人として暮らす一族の一員であり、共同体からはみ出した点で主人公と共通する。『八月の光』でジョーは、同じジェファソンに居ながらリーナと一度も顔を合わせることがない。おそらく作者は、リーナをジョーから一定の距離を置いたままに保ち、彼女の母性と静謐さが最後のジョーのリンチの凄惨さを多少なりとも緩和することを期待している。彼女が語り手によってキーツの「ギリシャ古壺に寄せる頌詩」に描かれた花嫁にたとえられ、死の外側をめぐる永遠の時間と結びつけられるのもそのためである。それに対し、「不死」の山の女は、主人公の被慈利と濃密に接触する。彼女は彼を一族の高貴な女性の屋敷に連れて行き、そこで彼は猪や猿の頭を持つ異様な男たちがいまだに昔の遺恨を残すさまを目撃する。しかし、山の女は、主人公が女に救済を求めつつ、再び殺したい衝動に駆られた

ところで突然姿を消す。リーナも山の女も、人種、ジェンダー、もしくは階級間の闘争で生じる暴力を何らかの形で和らげる母性的役割を担うことは明らかである。

しかしそれぞれのテキストにおいてこの女たちの役割は、苦難に対する安易な解決法や救済を与えることではなく、むしろ主人公たちが自らに課した放浪を続けることをしっかりと定めることである。リーナも山の女も、漂流する主人公と家父長制社会の和解を仲介したりしない。リーナは小説の最後でも、赤ん坊の父親ルーカス・バーチを追いかけていき結婚するつもりのようなのだが、ルーカスは仕事の元パートナーであったジョーを裏切り、ジョーにかけられた賞金をねらっている。聖母マリアと連想されたり、キーツの詩と関連して「永遠に動きつつ、前進することなく骨壺の周りをめぐる」(7)といわれるリーナは、いまだにこの無責任で貪欲な男との家庭を考えている。もちろん、彼女はもっとよい選択をして、彼女に付き従う誠実なバイロン・バンチの愛を受け入れるかもしれない。いずれにせよ、リーナは地母神としての原始的豊饒さを保つ一方で、家族、家庭の建設を夢見、南部社会の基礎的な一単位となることを目標にしているようにも見える。リーナは、逃げた男を未婚の臨月状態で捜しにやってきたことを問われて次のように述べている。「[子供が] 生まれるときは、家族は一緒にいるべきだと思うわ。特に一人目のときはね。神様がちゃんとそのようにしてくださいと思うわ」(23)。彼女は、ジョーのリンチについて家具商人が話したがったとき、沈黙を守る賢明さを見せている。ジョーはリンチされて当然、という論理に彼女は組みしない。しかし彼女の沈黙はむしろ、ジョーをリンチしたという町の記憶を、リーナすら今後も持ち続けなければならない、家族ができてその記憶は何らかの形で共有されていく、ということも示している。

リーナは、ジョーの後を継いでさすらい人となり、社会との関係もジョーよりはうまく調整していけるかもしれない。リーナとその赤ん坊、それにバイロン・バンチは擬似家族として旅を続ける—結婚するのかもしれないのか、旅を終えて落ち着くのか、このまま移動し続けるのかわからぬまま。リーナは、ジョーの人種的アイデンティティのあいまいさにみられる反体制性を彼女の擬似家族の中でゆるやかに継承する。フォークナーはバイロンに代理夫兼父親の可能性を持たせ、リーナたちに家父長制社会やその権威との接点が少ない新しい家族像を模索している。もっともリーナもバイロンもリンチの記憶を共有せざるをえず、それによって彼女が子供を産んだジェファソンという地域共同体の責任の一端を担う。

「不死」の山の女のほうは、屋敷を取り囲む異形の男たちや血が流れる川に被慈利を案内した時点で、これら排除されて遺恨を晴らそうと隠れ住む人々の限界を暗示する。彼らの話は平家の落人たちを連想させるが、中上は彼らが平家の落人と断定することを慎重に避ける。彼らの話と平家の歴史物、軍記物との類似点と相違点は、擬似的な過去の歴史を装わせつつ、彼らを歴史とは切り離された物語空間に隔離する。山の女は被慈利に、彼女に家父長制社会からの救いを求めることも、山中で伝統的な物語空間の幻想の中で生きることも袋小路の行き止まりに過ぎないこ

とを示す。「不死」の偽聖は、そのあいまいなアイデンティティをかかえたまま、旅の中で自分が放浪しつつ求めるものの正体を見極め、犯した殺人の意味を問い続けなければならない。

『八月の光』でフォークナーは古代神話や怪物退治の伝説を間接的に利用して、南部白人神話が、自らの立場とその暴力を正当化するために白人／黒人の二項対立に頼ることを明らかにした。地域共同体とアウトサイダーの差異を強調し、差別化される人間を怪物化することで暴力が容認され、男性と白人の権威を守る。ジョーとジョアンナの闘いも、人種問題として片づけられてしまう。しかしフォークナーは、人種とジェンダーの差異を超え、混血の意味を追求する中で、単に南部社会の人種差別を告発しているのではない。選民と地獄落ちの者、ピューリタンの善悪区別などにみられる二項対立は、南部出身であるマッキーチャンばかりでなく、北部出身のジョアンナ・バーデンの家系にも明らかである。二項対立はアメリカ合衆国の考え方の基本にあり、その正義の概念、「我々」と「彼ら」の決定的分離を貫いている。ジョーは南部社会の黒白区別の犠牲者だが、彼の怪物化されたあいまいさは合衆国全体の物語構造の二項対立性に挑戦を突きつけている。

一方、中上健次は、日本の物語に見られるメビウスの輪のようなからくりを強く意識する。日本の伝説がしばしば語る神秘的な奇跡は、階級制社会の聖なるものと穢れたものを逆説的に結びつける。語り手は、病に呪われ貧窮したさすらい人が、聖人や高貴な人との出会いでその息子や縁者と認知され、救済される話を物語る。高貴な身分の父親の慈愛と権威に満ちた確認をきっかけに、息子は霊験あらたかに治癒し、自分を捨てた父と和解する。そのような救済の誘惑に対し、中上は、被慈利の前に自分の身体を投げ出しながら、仏の救いと同時に権力との一体化、さらには奪取をたくらむ女を登場させる。主人公の偽聖人は彼女の絶望的な試みの共犯者でもある。しかし彼は、性的な絶対服従の演技に権威へのおもねりの危険性を嗅ぎ取り、危険な屈服のジェスチャーを自らにも相手にも禁じる。彼のテキストに登場する、強い男の前で性的に屈服してみせる女にはしばしば、日本の物語の魅力と危険がこめられている。¹²⁾ その女を前に、反発しつつ自身の姿を認める男は、作家中上の分身ではある。下層階級とさげすまれた者とその階級社会の頂点に立っている者の二項対立は、あいまいでひそやかな親近性で結ばれてはならないはずだが、日本の物語はその甘美なメビウスの輪を作り出している。

「不死」の主人公は、そのような物語の輪から逃れてさすらいを続けるしかない。『八月の光』のジョーは、ジェファソンの町に細く垂直に吹き上がる血潮となって記憶される。フォークナーはこれを、二項対立のコードで成り立つ社会を断罪する暴力的な垂直のイメージとしてとどめる。しかしリーナが続ける旅とあいまいな擬似家族は、二項対立を機軸とする社会に突きつけたジョーの挑戦を、リーナがより柔軟な形で水平に継続することを暗示する。中上の主人公の被慈利も、ジョーと同じく自分のアイデンティティがあいまいで家父長制社会に受け入れられないことを意識している。しかし中上は、『八月の光』のように男性主人公の挑戦を女性に引き継がせること

なく、二項対立も、またその対立のあいまいな解消、合体化も拒否したまま、主人公を再び放浪の旅へと追いやる。被慈利の闘争／逃走の孤独感と絶望はジョーと共通している。しかしリーナのように、家族志向も持った登場人物による課題の継承、他者を巻きこんでの共有があるかどうかによって、放浪の旅は、混迷の中にも明暗が分かれる。

注

- 1) この語句はニナ・コルニエツの批評書 *Dangerous Women, Deadly Words: Phallic Fantasy and Modernity in Three Japanese Writers* の題名から引用した。この書においてコルニエツは、中上その他の日本作家のテキストにおけるジェンダーとセクシュアリティを鋭く分析している。
- 2) 『紀州 木の国根の国』(1978) の冒頭で中上は、彼の故郷である熊野、紀州の探索ルポに関して、フォークナーのジェファソンに言及している。また中上は、フォークナーの南部から出発し、特定地域でなく「南部」というイメージが引き起こす想像力に着目し、ラテンアメリカ文学の土地感覚や自身の紀州、フォークナーのジェファソンに共通するダイナミックな生命力について語っている。中上「繁茂する南」参照のこと。
- 3) 『日本書紀』には、イザナミノミコトは火の神を生んだときに死に、熊野に葬られたとある。五来重『熊野詣—三山信仰と文化』16-19。
- 4) フォークナーと中上のテキスト比較は、主にクエンティン・コンプソンを主人公とするフォークナーの小説(『響きと怒り』『アプサロム、アプサロム!』)と竹原秋幸を主人公とする中上の秋幸3部作(『岬』『枯木灘』『地の果て 至上の時』)が中心である。以下を参照。Michiko Yoshida, "Kenji Nakagami as Faulkner's Rebellious Heir," *Faulkner, His Contemporaries, and His Posterity*, 350-60; Mats Karlsson, "Nakagami and Faulkner," *The Kumano Saga of Nakagami Kenji*, 60-74. 日高昭二『『枯木灘』から『地の果て 至上の時』へ—「風景」と「資本」の物語、加藤雄二「『繁茂する南』とウィリアム・フォークナー、ガブリエル・ガルシア=マルケス—声と語りと存在の場所」、アン・マクナイト「crypticismまたは亡霊の読み直しと中上のフォークナー」。千石英世は女系の物語の神話化と言う点で中上の『鳳仙花』を評価しているが、フォークナーのテキストと直接比較してはいない。フォークナーと中上の全般的な比較としては、熊野大学主催の夏季セミナーからシンポジウム「フォークナーと中上健次」を採録した『早稲田文学』28号がある。
- 5) 『熊野集』の出版は1984年だが、「不死」の初出は1980年の『群像』である。中上は『地の果て 至上の時』の一部を1981年に書いており、1982年には原稿を書き終えている(『中上健次全集』15、759)。中上はフォークナーの『八月の光』について、1985年の「繁茂する南」その他のエッセイでよく言及している。
- 6) フォークナーの女嫌いについては、フェミニズム批評から一時過激な批判も受けたが、ジェンダー批評の発展に伴い、より包括的な評価がされるようになっていく。Deborah Clarke, Minrose C. Gwin, John N. Duvall 参照。中上については、モネットが、中上の強力な擁護者である第一線の男性批評家たちが、彼のテキストにおける女性への暴力描写についての批判を軽く受け流す傾向に疑問を呈している。モネットの議論は冷静でそれなりの説得力を持つ(Monnet 14-15)。一方コルニエツは、中上のアンドロジニーのあいまい性について検証し、中上の暴力性と女性蔑視を単純に結びつけることを避けている。
- 7) 四方田犬彦は中上の「不死」を魔界参入譚の1つとして取り上げている。四方田 92-93参照。イヴ・ジマーマンも魔界参入譚の伝統との関係で「不死」を取り上げている(199-206)。
- 8) たとえば俊徳丸伝説の主人公は陰謀によって失明させられ、病を得て父の館から追放されるが、ついに霊験により体内の毒が浄化され、幸福な身分に戻る。能の「弱法師」はこの伝説に基づく。中上は自分の作品に、この伝説や能の影響を認めており、それは『熊野集』にも明らかである。中上「短編小説としての能」参照。
- 9) 『日輪の翼』で中上は、路地出身の老婆たちが若者たちとともに旅に出て、伊勢参りをして神宮を掃

き清めるさまを描く。路地の消滅に直面した彼女たちは、東京へ行って皇居を訪れる願望を持っている。

- 10) コルニエッツは、中上のテキストがしばしば、女性の身体を霊界への導入路とすることを指摘する。ジーマンは「不死」の山の女を天女、または曼荼羅の表象として解釈している。
- 11) ミルゲイトは、リーナを地母神ディアナ、もしくは聖母マリアと見る解釈を提供している。アーヴィング・ハウも、リーナに関連して、ギリシャのヘレンを持ち出す。フォークナー自身、ヴァージニア大学でのインタビューで、リーナには「何か異教的な性質」がある、と述べている。
- 12) 中上は、日本の物語は、母性的な語りを用いて聞き手を家父長制社会構造のなかへ封じ込める役割をしていると考える。「対談 物語の消失と流亡」、『風景の向こうへ 物語の系譜』参照。

引用文献

- Clarke, Deborah. *Robbing the Mother: Women in Faulkner*. Jackson: UP of Mississippi, 1994.
- Corniyetz, Nina. *Dangerous Women, Deadly Words: Phallic Fantasy and Modernity in Three Japanese Writers*. Stanford: Stanford UP, 1999.
- Duvall, John N. *Faulkner's Marginal Couples: Invisible, Outlaw, and Unspeakable Communities*. Austin: U of Texas P, 1990.
- Faulkner, William. *Light in August* (The Corrected Text). New York: Vintage, 1987.
- Gwin, Minrose C. *The Feminine and Faulkner: Reading (Beyond) Sexual Difference*. Knoxville: U of Tennessee P, 1990.
- Gwinn, Frederick L. and Joseph L. Blotner, eds. *Faulkner in the University: Class Conferences at the University of Virginia, 1957-1958*. Charlottesville: UP of Virginia, 1977.
- Howe, Irving. *William Faulkner: A Critical Study*. New York: Random, 1952.
- Karlsson, Mats. "Nakagami and Faulkner." *The Kumano Saga of Nakagami Kenji*. Edsbruk: Akademitryck AB, 2001. 60-74.
- Millgate, Michael. *The Achievement of William Faulkner*. New York: Vintage, 1966.
- Monnet, Livia. "Ghostly Women, Displaced Femininities and Male Family Romances: Violence, Gender and Sexuality in Two Texts by Nakagami Kenji: Part I." *Japan Forum* 8 (1996): 13-34.
- Yoshida, Michiko. "Kenji Nakagami as Faulkner's Rebellious Heir." *Faulkner, His Contemporaries, and His Posterity*. Ed. Waldemar Zacharasiewicz. Tübingen: Francke, 1993. 350-60;
- Zimmerman, Eve. *Out of the Alleyway: Nakagami Kenji and the Poetics of Outcaste Fiction*. Cambridge (Massachusetts) and London: Harvard University Asia Center, 2007.

浅田彰、いとうせいこう、マッツ・カールソン、柄谷行人、高澤秀次、野谷文昭、渡辺直己「フォークナーと中上健次」『早稲田文学』28 (2003) : 4-39。

加藤雄二「『繁茂する南』とウィリアム・フォークナー、ガブリエル・ガルシア＝マルケス＝声と語りと存在の場所」『フォークナー』1、(1999) : 35-45。

五来重『熊野詣ー三山信仰と文化』講談社学術文庫 2007年。

千石英世「中上健次とフォークナー」『中上健次 (国文学解釈と鑑賞 別冊)』関井光男編集、至文堂、1993年。58-62。

中上健次『熊野集』(柄谷行人、浅田彰、四方田犬彦、渡辺直己編『中上健次全集』5 集英社1995年、191-438)

——『風景の向こうへ 物語の系譜』(柄谷行人、浅田彰、四方田犬彦、渡辺直己編『中上健次全集』15 集英社1996年、55-281)

——『紀州 木の国根の国』(柄谷行人、浅田彰、四方田犬彦、渡辺直己編『中上健次全集』14 集英社1996年、481-679)

——『日輪の翼』(柄谷行人、浅田彰、四方田犬彦、渡辺直己編『中上健次全集』7 集英社1995年、7-

279)

- 「対談 物語の消滅と流亡」『国文学 解釈と教材の研究』36-14（1991）：12-33。
- 「短編小説としての能」（柄谷行人、浅田彰、四方田犬彦、渡辺直己編『中上健次全集』14 集英社1996年、391-92）
- 「繁茂する南」（柄谷行人、浅田彰、四方田犬彦、渡辺直己編『中上健次全集』15 集英社1996年、535-43）
- 日高昭二「『枯木灘』から『地の果て 至上の時』へー「風景」と「資本」の物語」『国文学 解釈と教材の研究』36-14（1991）：69-77。
- マックナイト、アン。「crypticismまたは亡霊の読み直しと中上のフォークナー」『フォークナー』1（1999）：46-56。
- 四方田犬彦『貴種と転生ー中上健次』新潮社 1996年。